

昭和61年度

県道中三谷・下井阪線建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1986.12

社団法人和歌山県文化財研究会

序

那賀郡打田町は紀伊国分寺をはじめ、紀伊国の文化の中心地の一つとして、原始・古代以来文化の華が咲き誇った地域であり、紀ノ川の河岸段丘上には貴重な文化財が数多くみられる地域であります。

このたびの発掘調査は、和歌山県土木部が県道中三谷・下井阪線改良工事を実施するにあたり、本会が和歌山県の委託をうけて、実施したものであります。

出土遺構・遺物の詳しくは本文に掲載されていますが、今回の発掘調査では主に中世の遺構・遺物が検出され那賀郡の中世史を語るうえで欠かすことのできない資料を提供したものであります。ここにその成果の概要を刊行し、今後皆様方の研究資料の一端ともなれば幸いと存じます。

最後に今回の発掘調査を無事に終えることができましたのは、ひとえに関係機関はじめ、調査に参加されました方々と、終始調査に協力と便宜をはかられました地元の皆様方のおかげであります。深く感謝の意を表し厚くお礼を申し上げます。

昭和61年12月25日

(社)和歌山県文化財研究会

会長 山東 永夫

調査経緯

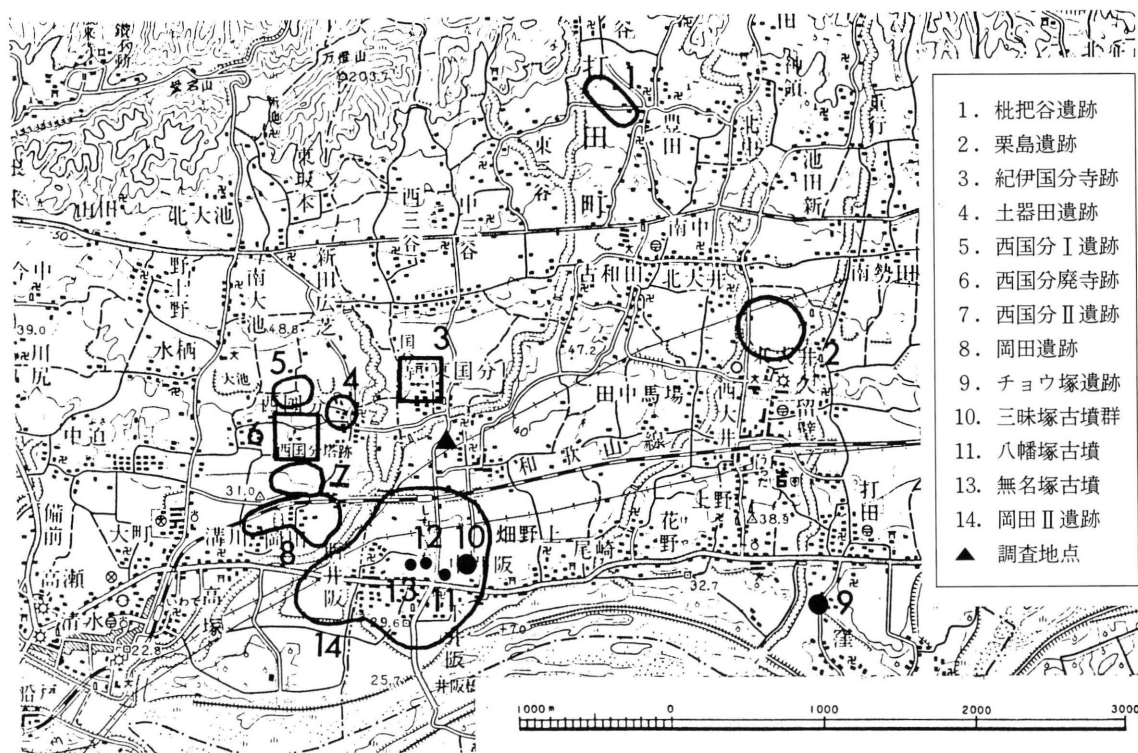
当遺跡は、地理的環境や周知の遺跡群等より判断して、人々の生活基盤の地として古来より繁栄してきたことは疑がう由もない。

調査地点の北に紀伊国分寺跡、南に岩出町から打田町にかけて広がる岡田Ⅱ遺跡、西に岩出町所在の西国分廃寺跡、岡田遺跡等周囲これらの遺跡に囲まれ環境、歴史的背景ともにこのことを裏づけている。

本遺跡より県道中三谷・下井阪線の建設工事に伴い、岩出土木事務所と県文化財課の事前協議に基づいて、昭和60年12月に実施された試掘調査によってその存在が明らかになったものである。試掘調査は道路建設用地内を、国道24号バイパスとの取り付け部より南から北へ1～24区に区切り、重機により幅1～2mのトレンチを設定し調査した。その内の第24区において包含層下の地山を切り込んだ中世遺構（SK-05）の検出に至った。

その後、当遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果、発掘調査を実施し遺跡の内容を明らかにすることになり、昭和61年8月25日より着手し、10月13日に発掘調査を完了した。以下、この発掘調査で得られた成果を記述する。

位置と環境



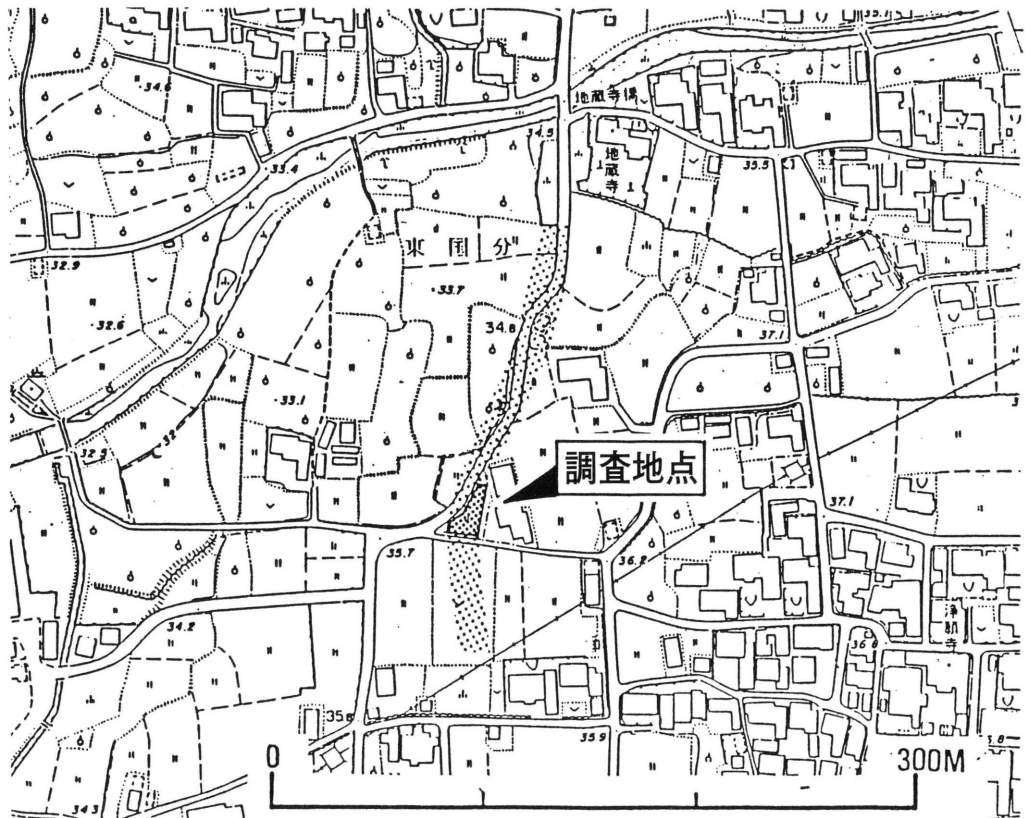
第一図 位置及び周辺の遺跡及び史跡

当遺跡は、那賀郡打田町東国分159番地ほかに所在する。遺跡周辺は和泉山脈南麓から紀ノ川に至るまで上、中、下位段丘が発達している。遺跡は標高約36~40mを計る中位段丘上に立地するが、和泉山脈に源を発する春日川が段丘北部を下刻しているため台地状地形の北縁部を占めて営まれていたことになる。

春日川を挟んだ北側中位段丘上には聖武天皇の勅願による紀伊国分寺が、さらに西方約800mの岩出町西国分の中位段丘の南端部には白鳳時代創建の西国分廃寺跡が所在する。しかし、縄文時代以降奈良時代に至るまでの周辺諸遺跡は、これらの寺院が営まれた中位段丘に及ばず下位段丘の北部を占めて岡田Ⅰ・Ⅱ遺跡、西国分Ⅰ・Ⅱ遺跡^(註3)などが営まれている。

また当地より南方850m内外には、中期から後期にかけて築造された八幡塚古墳や一基の前方後円墳と三基の円墳で構成される古墳時代後期の築造とされる三味塚古墳群や、現在は削平され^(註4)ているジョウ穴古墳、無名塚古墳等が点在している。

このような状況から中位段丘への人々の進出は、寺院建設を除けば本遺跡がそうであるように中世以降によって推し進められたものとみられる。なお当地は中世以降田仲荘に属し、北は池田荘、西は岡田荘、南は荒川荘に接する^(註5)。以上の遺跡が明示するごとく、この地は古代より紀伊国の中心的な位置を占めてきたのである。



第二図 調査地点

検出遺構

SK-01 調査区南端で検出した。その上部が殆んど削平されたと思われる最大径2.5m、深さ10~20cmの不定形を程する土壌で、堆積土は三層に分層され、主として茶褐色土で、底では厚さ2~3cmに灰色粘質土が充填した状態にあった。出土遺物は土師器小皿片、瓦器小皿片が僅かではあるが出土している。

SK-02 SK-01同様殆んど削平をうけたと思われ、楕円形(1.0m×2.6m)のプランで深さ10~15cmを計測する土壌である。覆土は単一の黄灰褐色土で底より上下逆転した状態の土師器小皿(第七図-1)が出土した。

SK-03 近世の攪乱壌で、現耕作土下より検出、覆土は五層に分層されたが、何れも攪拌された状態にあり、伊万里碗等が出土している。

SK-04 調査区中央やや北半部において検出した。東西約2.6m、南北約2.1mの楕円形を程し、深さは検出面より0.9mを測る中世墓と思われる土壌である。掘り下げ途中において瓦器片(碗・皿)(第六図-1~3、20~27)、土師器小皿(第七図-2~5)大皿(第七図-15・16)が多量に出土し、底より完形の瓦器碗(第六図-1)土師器大皿(第七図-15)がそれぞれ一個体出土した。

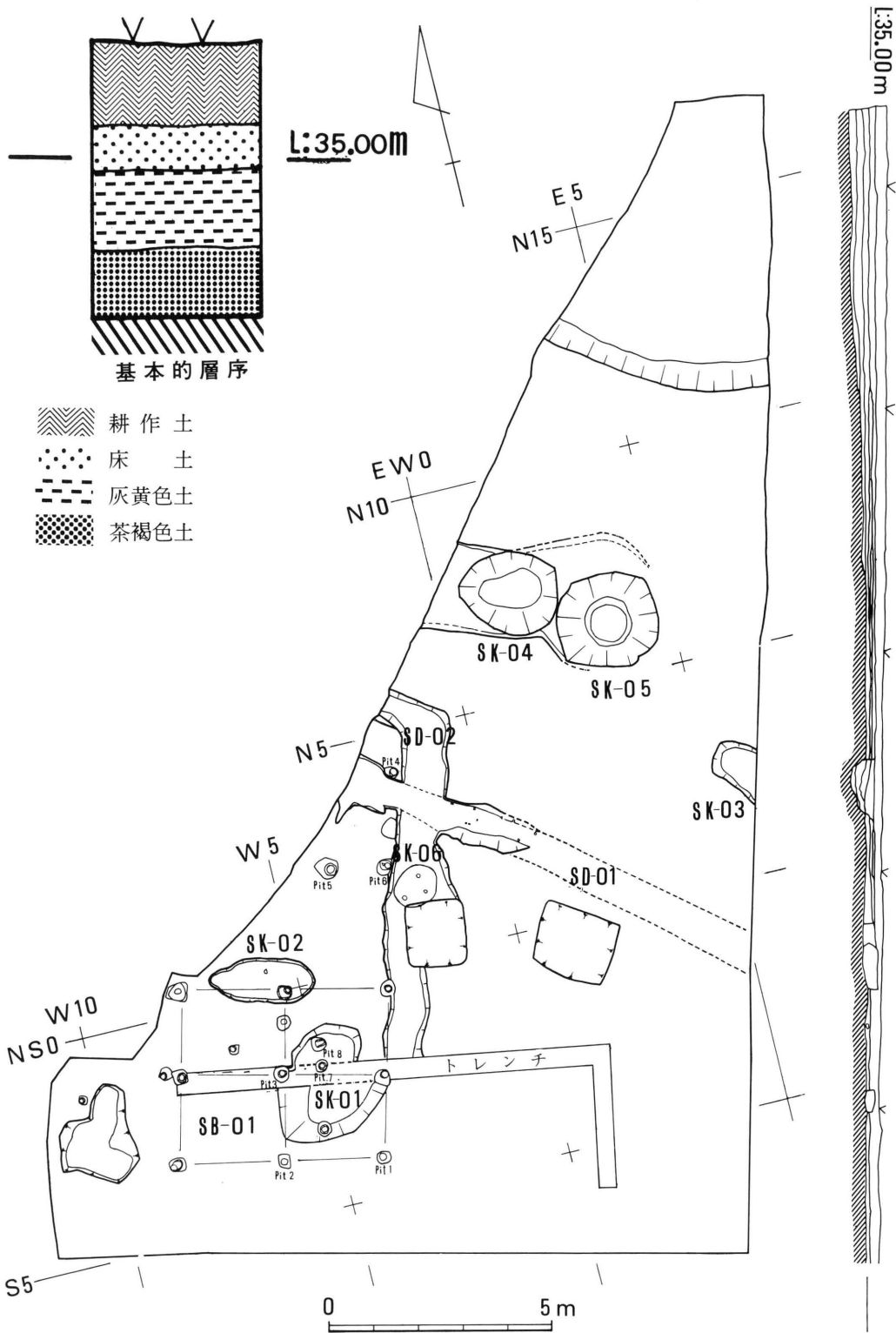
SK-05 ほぼ円形で直径2.3mを測り、集石で覆われた深さ0.9mの中世土壌墓である。集石は平均、人頭大の河原石を利用して土壌の中心に落ち込むような状態で検出した。集石の間に瓦器碗の完形品二点(第六図-7・8)(図版六-10・11)、土師器片(大皿、小皿)、土師質羽釜片(第七図-18・19)(図版七-13)等が多量に出土した。また奈良時代の平瓦片(図版七-14)三点も落ち込んだ状態で出土している。底はほぼ平坦で直径0.7m余りの円形で、完形の瓦器碗(第六図-9)(図版六-9)、土師器小皿(第七図-8)(図版七-4)、曲物の底板とみられる木製円版(直径13~14cm、厚さ5mm)(第七図-22)(図版七-17)が底より約10cm上で傾むいた状態で出土した。

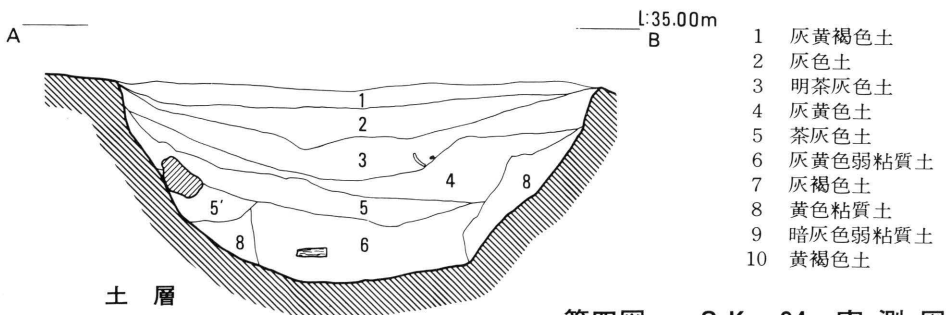
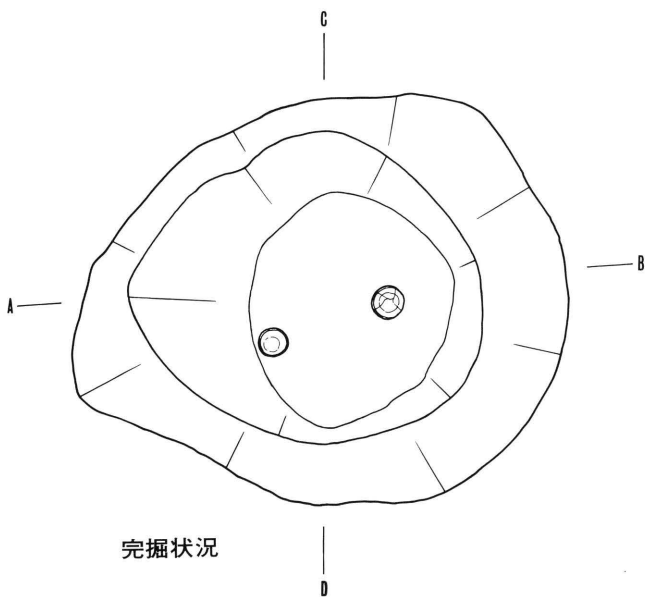
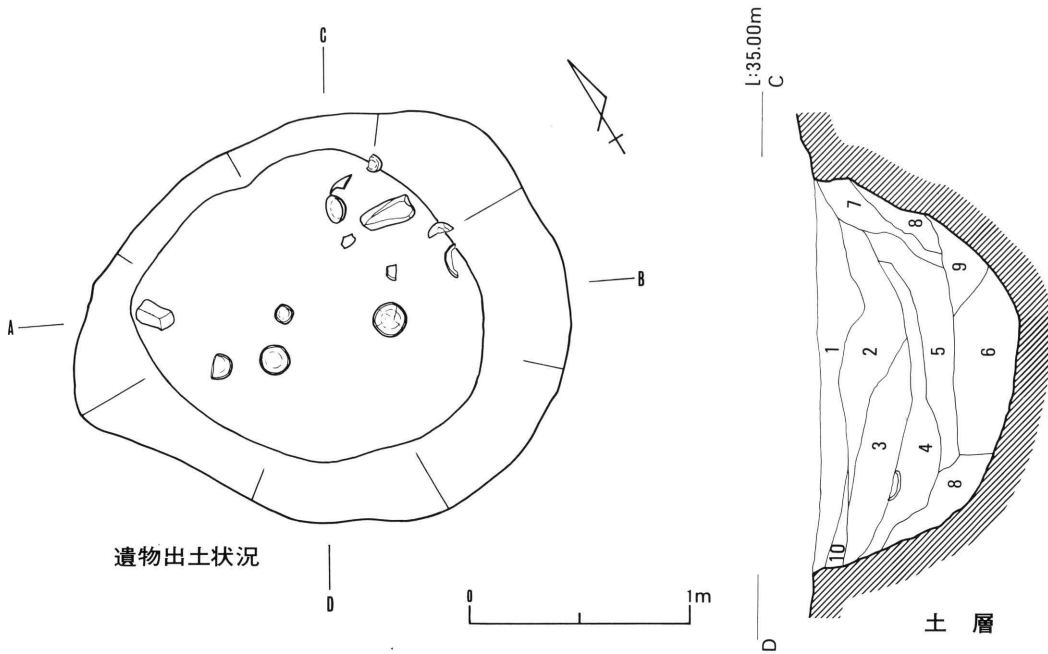
SK-06 長径1.3mのSD-01を切り込んだ、不定形な土壌で深さ15cmを測る。瓦器小皿(第六図-30)三点が出土している。

SB-01 調査区最南端で検出した。桁行二間(間尺2.8m)、梁間二間(間尺2.3m)の建物である。柱穴より瓦器(碗・皿)、土師器小皿が数片出土している。

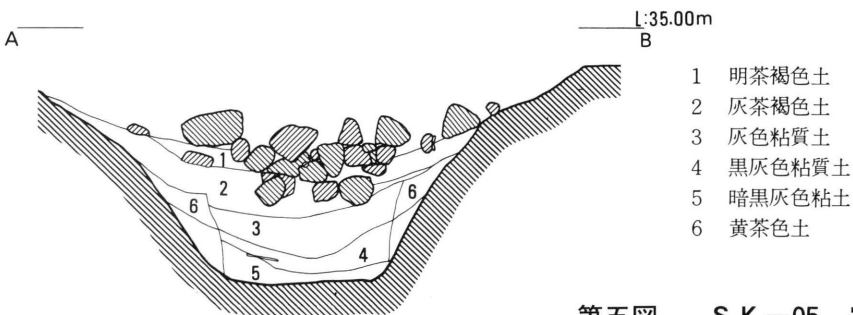
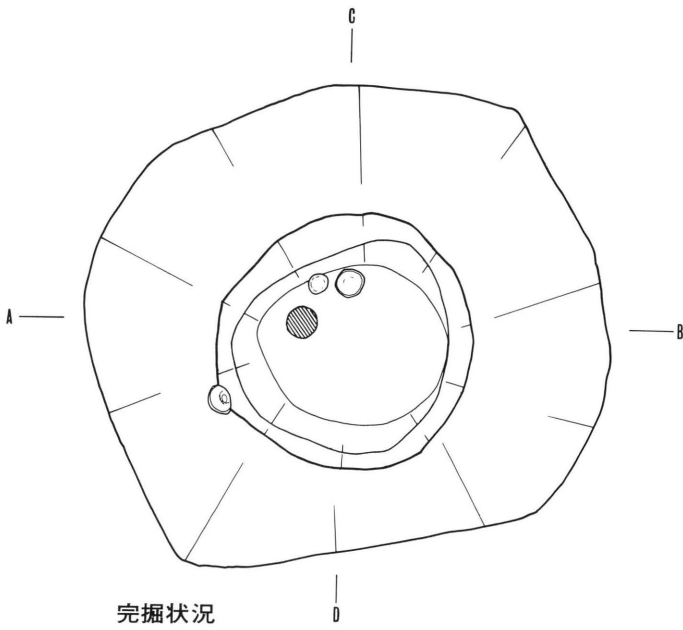
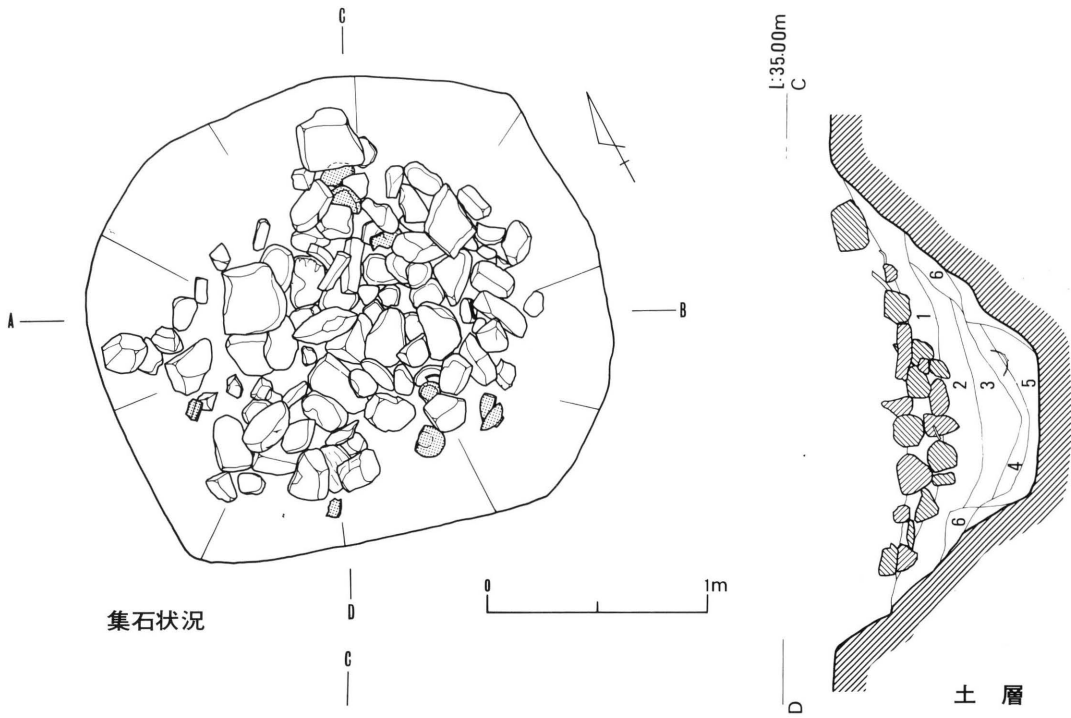
SD-02 SK-01の東部より北へ延び西方へ折れる幅約1.0m、深さ10cm~20cmを測る溝状遺構である。瓦器碗(第六図-10)(図版六-8)、土師質小皿(第七図-4)が覆土の灰色土より出土している。

SD-01 SD-02と交差する近世以降の東西に伸びる溝で北肩部には杭列が走る。幅約1.0m、深さ50cmを測る。田圃に関連する溝であろう。





第四図 SK-04 実測図



第五图 SK-05 实测图

出土遺物

SK-04の出土遺物

〔瓦器碗〕（第六図-1～4、10～13、図版六-1～6）口径14.5cm内外、器高4.5cm前後である。口縁部内・外面に横ナデ調整を施し、口縁端部に沈線が認められるもの（1～4、10～11、13）と認められないもの（12）がある。高台は比較的その機能を保ち、体部と高台の境が明瞭でなく貼り付け面が幅広で形骸化する一歩前の段階である。外面は全てミガキを施さず、二段、或は三段の雑な指押えを施している。とりわけ底より出土した（1）は指押えの単位が規則正しく、他と比べ小さく丁寧である。内面はミガキ幅一条/1.5mm体部上端より丁寧に施すもの（1・10）と粗いもの（2・4・13）に二分される。見込はループ状暗文を施している。

〔瓦器小皿〕（第六図-20～27、図版六-17～19）口径8.5cm～9cm未満、器高1.5cm前後である。形態的に2タイプ有り、底部より口縁部が鋭角に立ち上がるタイプ（第六図-20・21）、やや外傾ぎみに立ち上がるタイプ（第六図-22～27）である。土師器小皿と形態を同一にする。それは同じ手法で調整された横ナデのシャープさより垣間見ることができる。内・外面のミガキ、暗文は全く認められない。総じて外面底は粗い雑な指押えを施す。色調は碗にも言えるが本来の瓦器の色合い、所謂、銀黒色を呈さず、黒灰色ないしは、灰色っぽい様相を示す。

〔土師器大皿〕（第七図-15・16、図版七-7～10）4点のみ出土した。口径13.5cm内外、器高3.5cm未満である。口縁部内・外面に一回のやや強い横ナデを施している。体部から底部にかけて弱い指押えを乱雑に施す。（15）は底部に板目圧痕が認められる。色調は淡肌色で、見込みに油煙と思われる付着物が認められ、それが二ヶ所口縁部まで確認できる。灯明皿に使用したものと思われる。

〔土師器小皿〕（第七図-2～5、図版七-1・2）瓦器小皿と同じく口縁部横ナデがシャープなもの（2～4）とそうでないもの（5）との二種ある。全体的に粗雑な作りである。

〔砥石〕（第七図-21、図版七-17）石材は石英斑岩である。両端が失損、四面が研砥面で擦痕を認める。

SK-05の出土遺物

〔瓦器碗〕（第六図-5～8・14～18、図版六-9～16）SK-04出土のものと同形態、調整共に同一である。器壁は肉厚で、全て口縁端部に一条の浅い沈線を巡らす。時期はほぼ同一と考えられる。

〔瓦器小皿〕（第六図-28～32、図版六-21）SK-04出土遺物と同じく一回の強い横ナデによりシャープな感がある。

〔土師器小皿〕（第七図-6～8、図版七-4・5）強い横ナデを施すもの（7・8）と口縁部が外方へ反るもの（6）がある。

〔土師質羽釜〕（第七図―17・18、図版七―13）口径31～32cmを計り、銚部は断面三角形で小さく付けている。外面口縁部より銚部にかけて煤が付着する。

〔曲物〕（第七図―22、図版七―18）蓋である。裏面に鋭利な刀子状工具による加工痕がある。

SB-01の出土遺物 破片ではあるがPit 1～3より土師器小皿、瓦器椀・皿など出土。

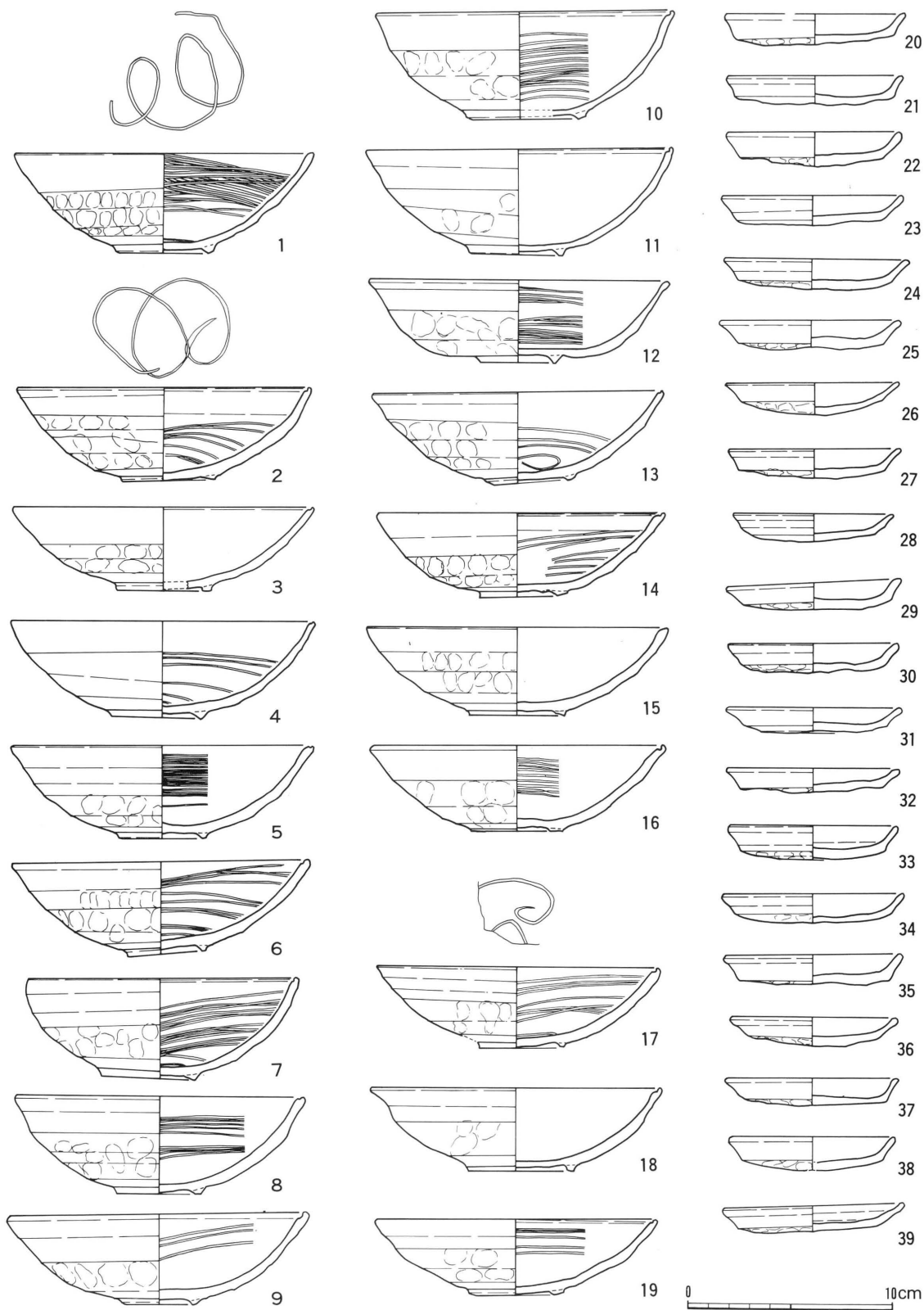
SD-02の出土遺物 瓦器椀片、瓦器小皿（第六図―33）。SK-04、05とほぼ同一時期である。

SK-02の出土遺物 土師器小皿（第七図―1）他瓦器片等出土した。

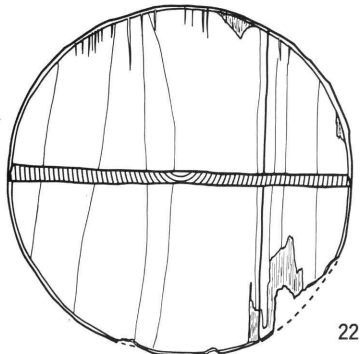
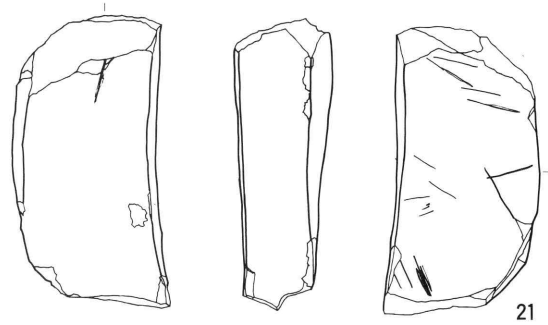
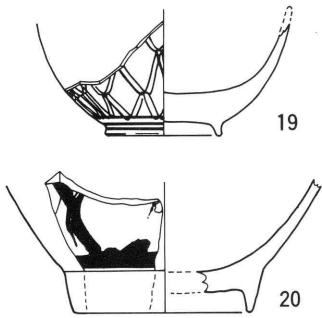
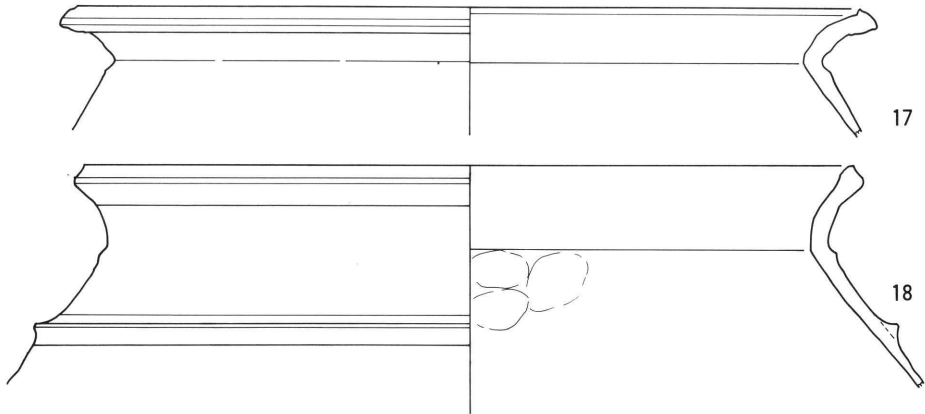
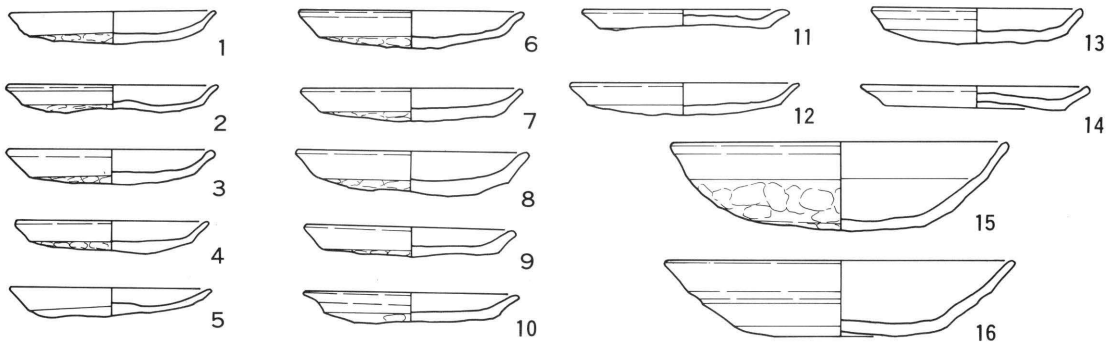
SK-06の出土遺物 瓦器小皿（第六図―30）、土師器小皿（第七図―9・10）両者共一回のきつい横ナデを施す。

包含層の出土遺物 瓦器椀（第六図―9、図版六―7）、瓦器小皿（第六図―36～39、図版六―26）石鏃（第七図―23・24、図版七―15）石鏃は2点隣接した位置より出土。両方共凹基無茎式石鏃で縄文時代である。

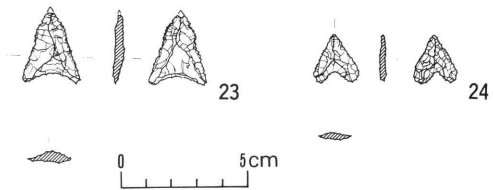
近世攪乱層の出土遺物 伊万里染付碗（第七図―19、図版七―11）網目文である。（第七図―20）は広東碗である。



第六图 遗物实测图 (瓦器)



22



第七図 遺物実測図 (土師器・その他)

結 語

前述した遺構、遺物の概略を補足する意味において、ここで調査地点及び周辺の遺跡と兼ね合わせ総括として記す。

出土遺物は縄文時代の石鏃、奈良時代の平瓦片、鎌倉～室町時代の瓦器、土師器、近世の磁器碗等がみられ、弥生時代、古墳時代などの遺構、遺物が欠落するもののほぼ連続する人々の営みがあったことが窺える。しかし、検出された遺構に関連する遺物は全て中世のものであり、原始・古代の遺構の検出にはいたらなかった。なお、検出された中世の諸遺構は、遺構相互の重複関係より若干の時期差が認められるが、殆んど同時期（鎌倉時代）と判断するに至った。

当遺跡は紀伊国分寺と隣接し、もちろん国分寺の勢力域の範疇である。国分寺の衰退時期とほぼ同じか、あるいはそれより少し後だと思われる遺構、遺物より国分寺との関係もまた興味深い事実である。また国分寺の衰退とともに、周辺においては瓦器、土師質羽釜、土師質皿、いわゆる中世遺物の散布地が数多く出現する。しかし、本遺跡を含め発掘調査によって遺跡の内容、性格等を把握しうるものは数少なく、那賀地方における段丘面の中世以降の開発の実情などの諸問題は、今後の発掘調査に委ねたい。

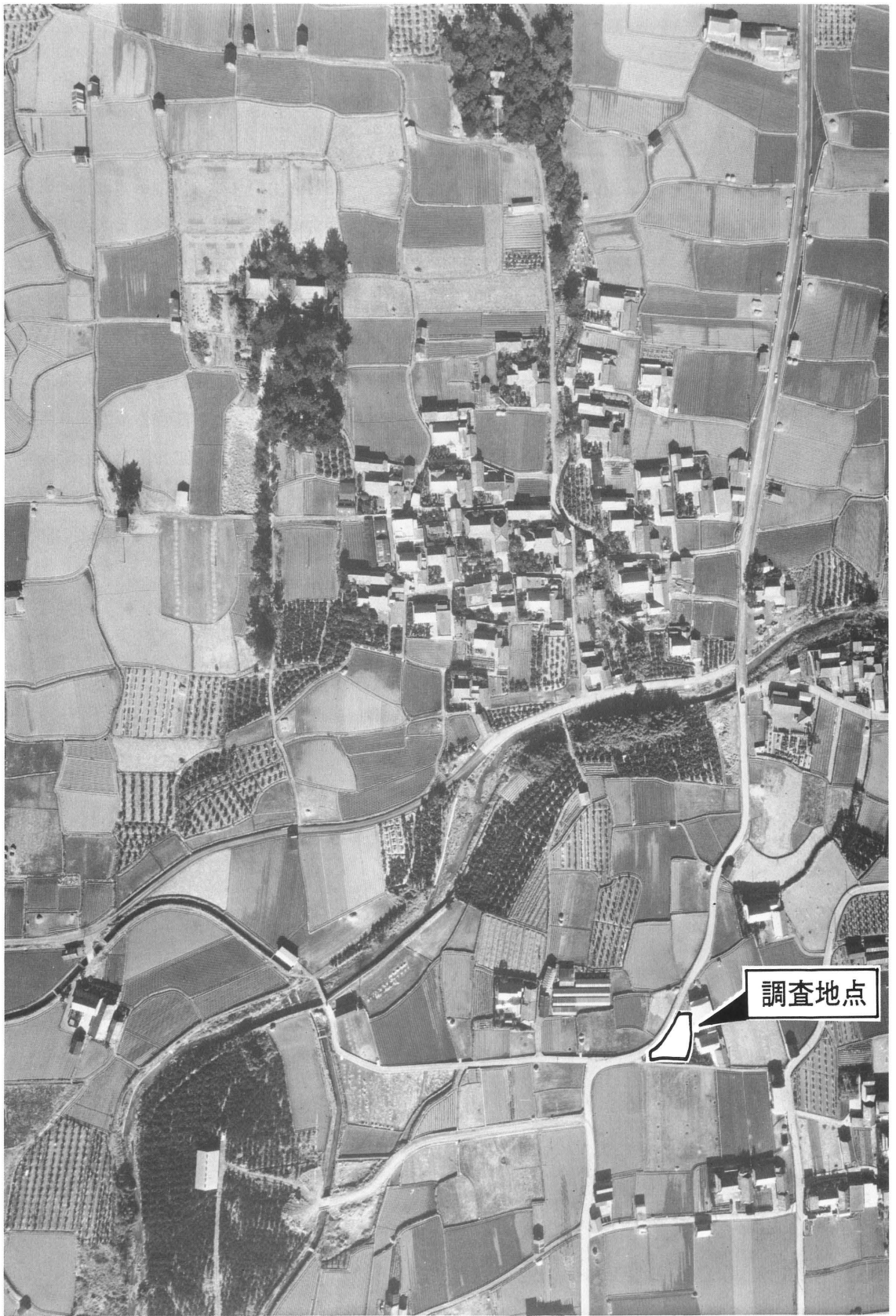
(註1) 打田町『打田町史』第一巻史料編Ⅰ 昭和56年

(註2) 岩出町教育委員会『岡田遺跡発掘調査概報Ⅰ』昭和51年3月

(註3) 岩出町教育委員会『岡田・西国分Ⅱ遺跡発掘調査概報』昭和56年3月

(註4) (註1)に同じ

(註5) 平凡社『和歌山県の地名』日本歴史地名大系31 1983年

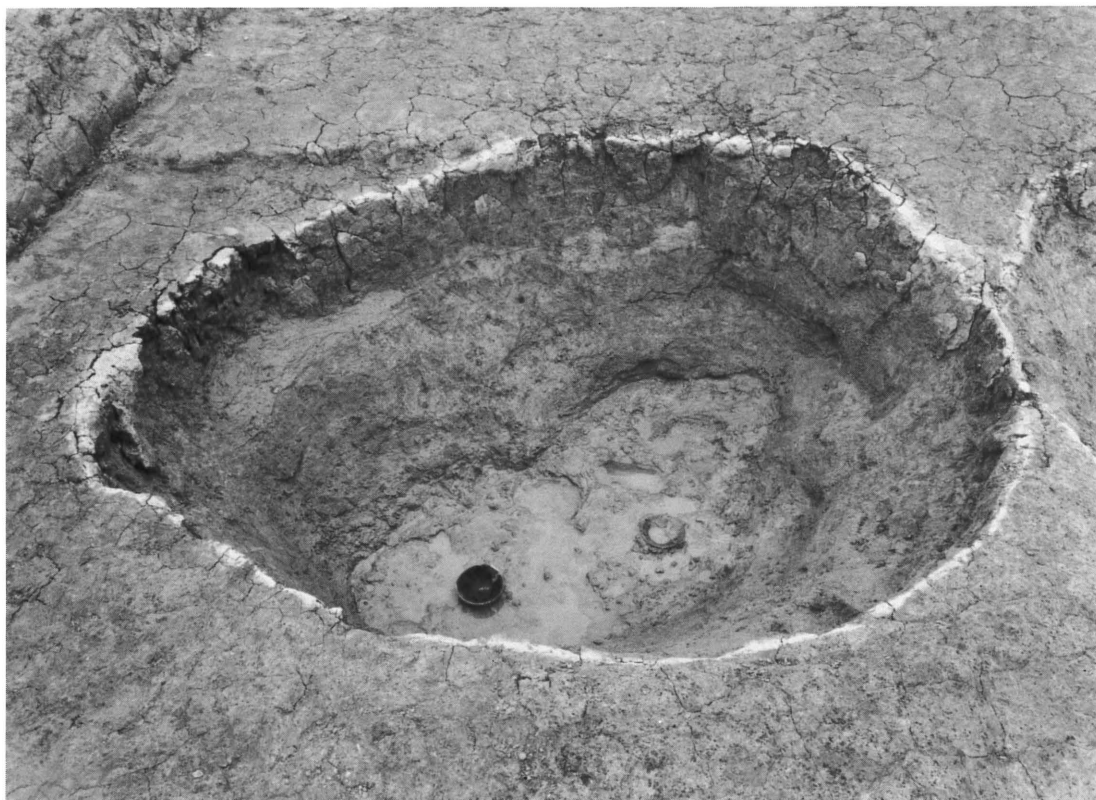




全 景 (南より)



全 景 (北より)



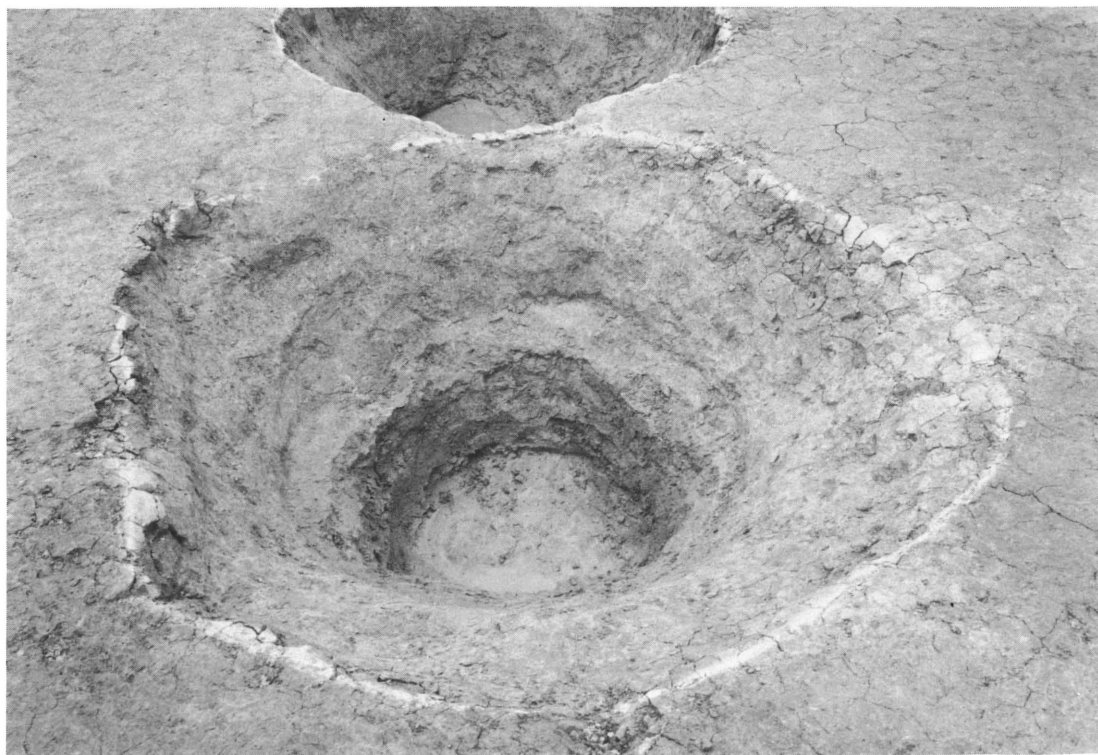
S K-04 底土器出土状況（南より）



S K-04・05 完掘状況（北より）



S K-05 集石状況 (南より)



S K-05 完掘状況 (南より)

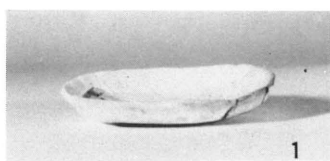


S B-01 (南より)

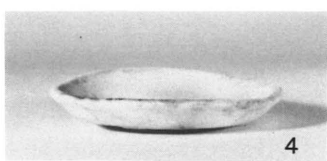


S K-05 遺物出土状況 (南より)

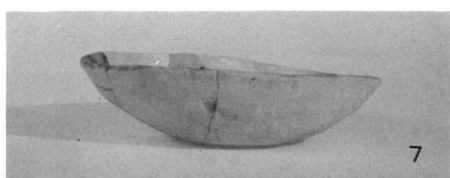
第七図版 出土遺物(土師器・その他)



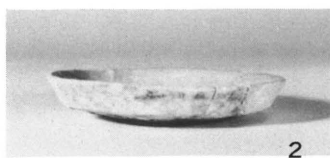
1



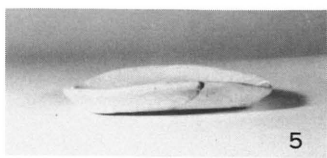
4



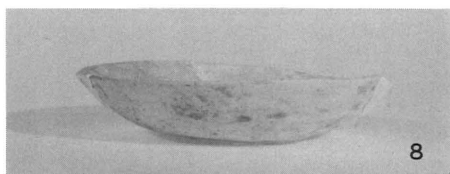
7



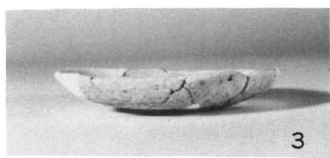
2



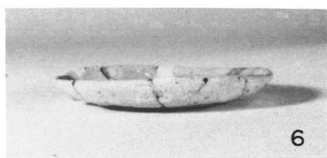
5



8



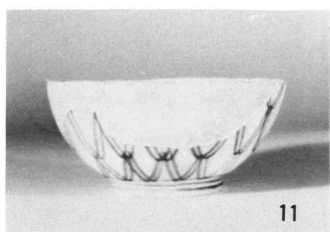
3



6



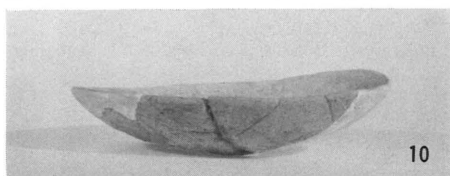
9



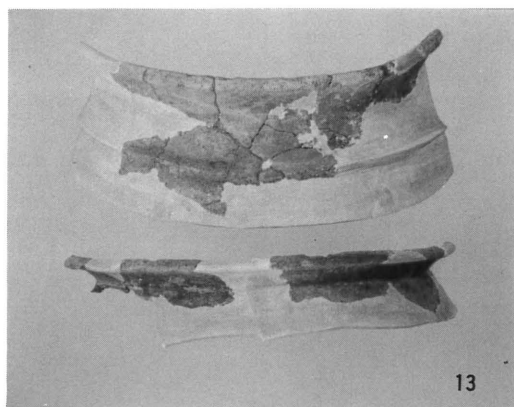
11



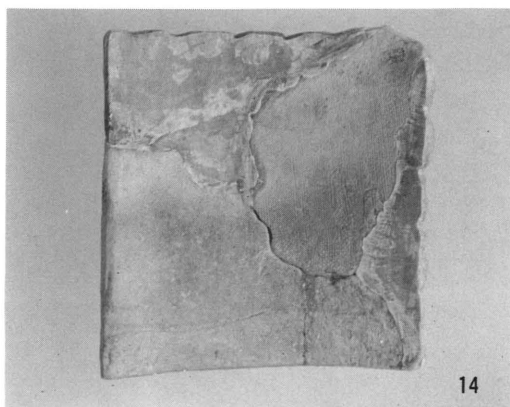
12



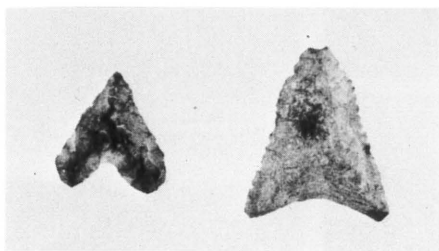
10



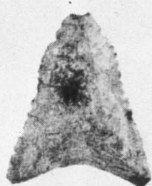
13



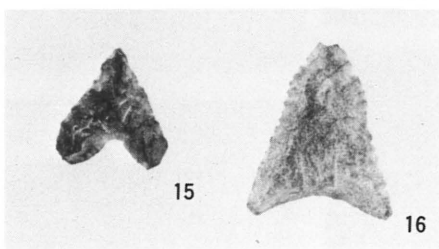
14



15



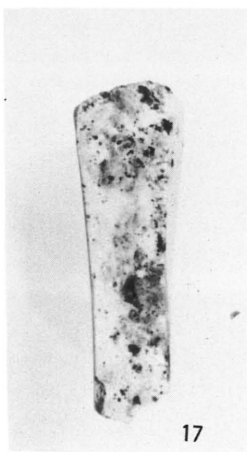
16



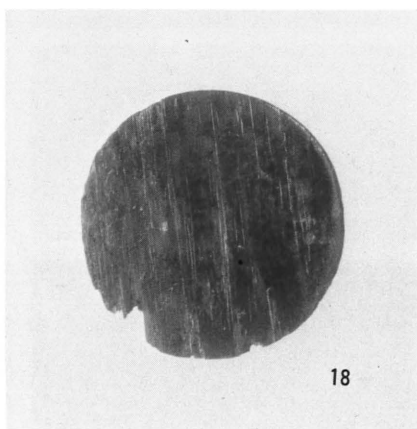
15



16



17



18

昭和61年度
県道中三谷・下井阪線建設工事に
伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 昭和61年12月25日

発行 (社)和歌山県文化財研究会

印刷 邦 上 印 刷